

氏名	廣 瀬 徹
学位(専攻分野)	博 士(医 学)
学位授与番号	博 乙 第 2378 号
学位授与の日付	平成 4 年 3 月 28 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 4 条第 2 項該当)
学位論文題目	子宮頸部腺癌広汎全摘例における術前動注化学療法の有用性に関する検討
論文審査委員	教授 折田 薫三 教授 木村 郁郎 教授 大森 弘之

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

子宮頸部腺癌は全子宮頸癌の5～10%と発生数こそすくないものの、予後は扁平上皮癌に比べ悪いとされており、近年発生頻度も増加傾向にある。当科では従来より広汎全摘術症例に対し、術後摘出物の検索により50～60Gyの外照射及びCDDP50mg/m²を3週毎3回経静脈投与する化学療法を後療法として、単独或いは併用して施行して来たが、予後の改善に結びつかなかった。そこで予後改善を目的として、広汎全摘術の対象となったI b期6例、II期12例、の計18例にCDDP50mg/m²を3週毎2回投与する術前動注化学療法を行い、一次効果について検討した。

コルポスコープによる腫瘍径の測定では、初回動注後1週で23.0±22.5%、2週では34.8±21.5%、6週で68.8±30.0%の腫瘍縮小率が得られた。組織学的には18例中10例(55.6%)に著しい効果が認められ、18例中2例(11.1%)は摘出物で腫瘍組織が消失した。組織学的拡がりについては、1970年から1981年までの対象群54例に比べて子宮外浸潤陽性率、リンパ節転移陽性率ともに減少傾向が認められた。

術前CDDP動注化学療法は良好な腫瘍縮小効果を示し、子宮頸部腺癌の予後改善に寄与するものと期待される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

予後不良の子宮頸部腺癌の広汎全摘例について、1970年以後の補助療法の変遷の中から、本研究者はCDDPに注目し、手術前にAngiotensin投与昇圧下に左内腸骨動脈よりCDDP

50mg/m²を2回動注し、コルコスコープで経週の、6週後の手術標で組織学的に効果を判定している。コルコスコープでは6週で約70%に腫瘍縮小が、組織学的には18例中10例に著効、内2例に腫瘍組織の消失をみている。このneoadjuvant chemotherapyは、手術成績の向上に寄与するものと考えられ、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があることを認める。